

批 孔 寓 話

——ひそみなら 顰に倣う ——

松 尾 善 弘

(一九九四年十月六日 受理)

Critical fable of Confucius

——'Fàng Pín'——

Yoshihiro Matsuo

は じ め に

世に誉れも高い美女の西施が、あるとき胸を病んでつと顔をしかめた。その顔がまたえも言われず美しいと噂し合うのを聞いた村一番の醜女が同じようにしかめ面をして歩き回るので、村人は恐れをなして逃げまどったという笑い話で有名な「顰に倣う」は『莊子』

(天運篇第十四)にある。

この、猿真似をして皆に嫌われるブスこそ外ならぬ孔子その人である。春秋の末期、すでに戦乱の世にあって必死に仁義の道を説いて回る孔子であったが、そのあまりに非現実的「理想主義的」主張のため、上は王侯貴族から下は庶民奴隷に至るまで敬遠され爪はじきされたさまを辛刺に皮肉ったものなのである。

本小論は天運篇のこのエピソードのある説話を分析しつつ、孔子

の人となり及びその思想と、翻って、ではその皮肉を飛ばす莊子の人となりや物の考え方はどうであったのかを究明しようとするものである。儒家思想と道家思想の異同の一端を探りあてられれば幸いである。

—

『莊子』外篇天運第十四(以下〈外・天運〉と略記、その他も同じ)は、冒頭の「天其運乎。」に由来する。『莊子』書全体が、言うまでもなく無為自然の道を説き、天地自然の理法の深遠さと無為の道德の偉大さを手を変え品を変え述べてやまないものである。その無為自然の道を解説し周知徹底させるための一法として、儒家思想の代表孔子を論い、『論語』の片言隻句を逆手に引用していると筆者はみるのである。従って全体を通して、時には儒家を超越し、時

には妥協し、また排斥し批判する。

天運篇もその例に洩れず、大半が孔子と老聃の問答をはじめとする対話形式の説話で成り、その中で孔子の道徳規範主義もしくは文化至上主義の矮少さ、時代錯誤性を揶揄批判するものである。以下、第三の問答の部分をも六つの段落に分け、原文・書き下し分・通釈・語釈の順で解説し、荘子の「真意」を探っていると思う。

孔子西遊於衛。顔淵問師金曰、以夫子之行為奚如。師金曰、惜乎、而夫子其窮哉。顔淵曰、何也。師金曰、夫芻狗之未陳也、盛以篋衍、巾以文繡、尸祝齋戒以將之。及其已陳也、行者踐其首脊、蘇者取而爨之而已。將復取而盛以篋衍、巾以文繡、遊居寢臥其下、彼不得夢、必且數昧焉。

今而夫子亦取先王已陳芻狗、取弟子、遊居寢臥其下。故伐樹於宋、削迹於衛、窮於商周。是非其夢邪。圍於陳蔡之間、七日不火食。死生相與鄰。是非其昧邪。(傍点筆者、以下同じ。)

孔子、西のかた衛に遊ぶ。顔淵、師金に問ひて曰く、「夫子の行を以て奚如と為す」と。

師金曰く、「惜しいかな、而の夫子は其れ窮せんか」と。顔淵曰く、「何ぞや」と。師金曰く、「夫れ芻狗の未だ陳ねざるや、盛るに篋衍を以てし、巾するに文繡を以てし、尸祝は齋戒して以て之を將る。其の已に陳せらるるに及びてや、行く者は其の首脊を踐み、蘇者は取りて之を爨くのみ。將た復た取りて盛るに篋衍を以てし、巾するに文繡を以てし、其の下に遊居寢臥す。彼、夢を得ざれば、必ず且に数々昧せん」とす。

今、而の夫子もまた先王の已に陳ねし芻狗を取り、弟子を取めて

其の下に遊居寢臥す。故に樹を宋に伐られ、迹を衛に削られ、商・周に窮す。是れ其の夢に非ずや。陳・蔡の間に囲まれ、七日火食せず、死と生と相与に鄰す。是れ其の昧に非ずや。

孔子があるとき西方の衛の国に遊説に出かけた。孔門第一の高弟顔回がそのことについて魯国の楽師金に尋ねた。「先生の今回の旅行をどう思われますか。」師金は答えた。「残念なことだ、きみの先生は行きづまるだろうよ。」顔回が「どういふことですか。」と問い返すと師金は答えた。「祭祀用のわらの犬は、神前に供えられる前、立派な箱に入れられ、美しい刺繡の施された袱紗で包まれ、神主は齋戒沐浴してうやうやしくそれを持ち運ぶ。しかし、一たび神前に供えられ用済みになってしまつと、路傍にぽいと打ち棄てられ、通行人は頭や背中を踏んづけ、粗糲とりは拾いあげて焚きつけにしてしまふ。ところが、もし物好きな男がいてその芻狗をもう一度拾いあげ、大切に箱に入れ美しい布で包み、その下で起居寢臥しようものなら、きつと悪い夢を見ないとすれば、しばしばうなされる破目に陥るでしょう。」

いま、きみの先生もまた昔の帝王たちが使い捨てた芻狗すなわち仁義礼楽の教えを拾いあげ、弟子たちを集め、その下で日常生活している。だから宋の国では切り倒された樹の下敷になりかけ、衛の国では足迹を削りとられ、商(宋)・周(衛)の地で行きづまつてしまつたのだ。これこそあの悪い夢を見るところではないだろうか。また、陳と蔡の国境では民兵に包囲され、七日間も火を通した食事にあたりつけずに生死隣り合う状態に陥りましたが、これこそバチがあたつてうなされたということではないだろうか。

○師金 魯国の大師(楽官)金のこと。ここではもちろん荘子の

代弁者として登場している。「周礼」(春官)に盲目の楽士を配下にもつ楽団長として「大師」の名がある。「論語」(八佾)に「子、魯の大師に樂を語りて曰く、樂は其れ知るべきか云々」の記述があり、微子篇にも「大師摯は齊に適く」以下、朱子の言う「賢人の隱遁」の条がある。泰伯篇にも「子曰く、師摯の始め、関雎の乱りは、洋乎として耳に盈てるかな」とあり、名指揮者師摯が編曲したイントロと関雎の樂曲の最後の樂章は、ひろびろのびのびと耳いっぱいひびきわたるといふ意味である。

〈内・斉物〉〈外・駢拇〉〈外・胠篋〉に、春秋時代、晋の平公に仕えた竽瑟の名手師曠(古代、樂師の多くは盲人で、彼も瞽曠とも称される)の名が出てくる。無為自然の道の最高至上の音樂「至樂は無樂」であることを説くために、莊子が例によって逆説法を用いて、俗世間では有名樂師である師曠の音樂も、天地自然の妙音の前ではとるに足りないものであることをくり返し述べたものである。

〈雜・徐無鬼〉には、道にふみ迷った黄帝が馬を飼う小童に行き会い、問答を交すうちその小童こそ無為自然の道の体得者「天師」天の如く偉大な師匠」だと讃える説話がある。

また〈内・養生主〉には、右師という足切りの受刑者を登場させ、一切の必然を必然としてそのまま受けとめ、自己に与えられた一切のものを自己のものとして肯定してゆくところに、人間の眞の自由と幸福があると説く話がある。

○窮 この説話の始めと終りには「而天子其窮哉」の文が置かれ、途中に「窮於商周」と「応物而不窮者」の二文、すなわち孔子の困窮した現状を表現する語としての「窮」と莊子哲学のキーワードと

しての「不窮」を使った文を置き、心にくいばかりの文章構成法である。つまり、「窮」こそはこの説話の字眼であると同時に「不窮」は莊子の思想を端的に説明する語の一つであり、また「窮」はアンチ道家、すなわち儒家思想の現状を象徴する語ともなっているのである。

眞に自由な超越者は、天地宇宙の眞理と一体となり、大自然の生成変化とそのまま一つになり、天地宇宙の悠久なるがごとく、大自然の生成変化の窮まりなきがごとく、一切の時間と空間を越えた絶対自由の世界に逍遙して何ものにも束縛されることがない。

〈内・逍遙遊〉の「無窮に遊ぶ」を福永光司氏は上述のように解説している。「莊子」内篇、朝日新聞社14ページ)〈雜・則陽〉にも「蝸牛角上の争い」の説話の中に、「心を無窮に遊ばしむ」という同様の文がある。

福永氏は〈内・斉物論〉の「無窮に應ず」を解説して次のように言う。(同書51ページ)一切の対立と矛盾を超えた絶対の一に立脚して、實在の眞相「道枢」は千変万化する現象の世界に自由自在に應ずるのである。そして、このような道枢の境地においては、「是」もまた一無窮、非もまた一無窮——是もまた一つの窮りなき眞理を含み、非もまた一つの窮りなき眞理を含む。換言すれば、そこではもはや、「此」と「彼」、「是」と「非」など一切の対立は、その相対性の根源において一つとなるのであると。

この外に〈内・徳充符〉には「死生存亡、窮達貧富、賢と不肖、毀譽、飢渴、寒暑は是れ事の變りにして、命の行りあわせなり。」〈内・応帝王〉には「無窮を体尽し、無朕に遊び、其の天に受くる処を尽して、得るを見る無し。」〈外・在宥〉には広成子の言として、

「彼の其の物は窮り無し。而るに人は皆以て終ると為す。」「故に余將に汝を去てて無窮の門に入り、以て無極の野に遊ばんとす」の文が見える。

また〈外・知北遊〉の第六の説話では、神農以下八人の登場人物のうち「無窮」「無為」「無始」の寓名をもつ人物に無為自然の道について問答させ、¹「大いなる宗師」すなわち²「道」が、人間の知覚による把握を絶し、日常的な分別知や形象概念などによって捉えることのできない根源的な実在であることを明らかにしている。

以上のように、³「莊子は「窮」や「為」の否定語「無窮」「無為」を効果的に使って、「道」の概念を説明するのに存分の能力を發揮する。だが、それらの語が実体性のない抽象概念を表現するのに得意な語であるが故に、現実を述べることに脆弱で、遂には儒家思想と混淆を来たす原因ともなっているのではないかと考えられる。そのことは、以下の事項の究明の中で次第にはつきりしてくることであらう。

○先王已陳芻狗 芻狗は祭祀用のわらの犬。用があれば用い、用がなければ棄てるものの喩としていう。『老子』(第五章)に「天地は仁ならず、万物を以て芻狗となす。聖人も仁ならず、百姓を以て芻狗となす。」とある。

先王(後段の三皇五帝など)がすでに陳列し終えた(使いつてた)礼義法度を指す。孔子がすでに陳腐になった先王の教えをふりかざして諸国をめぐる歩き、門人を集めて学ぶ時代錯誤を揶揄する。

○伐樹於宋 孔子が宋に行ったとき、門人たちと大樹の下で礼を習っていたが、宋の司馬桓魋にその樹を切り倒して圧殺されそうになった。そのとき孔子の吐いた言葉が『論語』(述而第七)の条で

ある。「子曰く、天、徳を予に生せり。桓魋、其れ予を如何せん。」時に魯の哀公三年、孔子六十歳であったという。

○削迹於衛 いくら追い払っても舞い戻ってくる孔子に業を煮やした衛の国では、みせしめのために彼の足跡を削り取ったのである。

○窮於商周 宋衛はそれぞれ商(殷)周の末裔が居住する国である。因みに孔子の祖先は宋人であり、「守株待兔」をはじめ間拔け者としての笑いの対象となる農夫などが宋人であることは、遠回りに孔子を批判している所以なのである。

○圍於陳蔡之間、七日不火食 『史記』(孔子世家)によれば、諸国を放浪中の孔子を南方の大国楚の昭王が招聘しようとした。そのことを聞き知った小国の陳蔡が、孔子の任用によって楚が更に強大化するのを恐れ、楚への入国を阻止するため軍隊を出して包圍した。そのために食糧を絶つたのだとする。

古来「固窮之節」出自の条として有名な、「陳に在りて糧を絶つ。従者病れ能く興つもの莫し。子路愠り見えて曰く、君子もまた窮することあるかと。子曰く、君子固より窮す。小人窮すれば斯に濫すと。」(衛霊公第十五)がその間の事情を如実に物語る。『論語』(先進第十一)には、「子曰く、我に陳・蔡に従いし者は、皆門に及ばざるなり」という一条もある。私と理想を同じくするために、私の理想の実現をたすけようとして、あの陳蔡二国における困難な状態のなかでも、私を見捨てなかつた弟子たちよ、かれらはみな、いつまでも私にくっついていてくれたために、就職の機会を失い、出世することができなかつた。不幸な誠実な人たちよ。と吉川幸次郎氏は古注を引いて解説する。(『論語』下 朝日新聞社4ページ) 孔子は五十六歳の時に魯の執政(宰相代理)を辞し、六十九歳で

再び故国に帰るまでの十三年間、諸国を遍歴した。その間、陳には二度ほど訪れている。「子、陳に在りて曰く、帰らんか、帰らんか。吾が党の小子、狂簡にして、斐然として章を成す。之を裁する所以を知らず。」（公治長第五）はその時の述懐である。『孟子』（尽心下篇）にも、「孟子曰く、君子（孔子）の、陳蔡の間に厄しむは上下の交り無ければなり。」また「万章問いて曰く、孔子陳に在りて曰く、なんぞ帰らざる云々の条が見える。

ここで問題にしたいのは、陳蔡の厄を始めとする危難に臨んで、孔子が発した「神がかり的」言辞についてである。すなわち、先の宋国における受難の際には、「天、徳を子に生ず。桓魋、其れ子を如何にせん。」と豪語しているし、匡の災難の場では、「文王既に没す、文、茲に在らざらんや。天の將に斯の文を喪ぼさんとするや、後死者（孔子）、斯の文に与かることを得ざるなり。天の未だ斯の文を喪ぼざるや、匡人其れ子を如何せん」と嘯いているのである。ここには自信を通りこして傲慢とさえ受けとれる孔子の心情が顔を覗かせているし、何よりも危難を回避するための原因究明、現実的処理方法を放擲して、徒らに観念的言辞を弄して逃避しようとしている孔子の姿勢が伺えるのである。よく言われるところの孔子の理想主義とは、裏返していえば非現実主義であり、かかる場において、それは遺憾なく發揮されていると言つてよいであろう。

諸国遍歴の長い年月の間、孔子は到る処で壁に突き当り、生死隣り合うような危難に遭遇した。莊子は孔子のそのような受難の原因がまさに彼の「めだちたがり屋」の性格に由来し、また彼の思想（ひいては儒家の思想）の後進性、保守性あるいはアナクロニズムにあると厳しく指弾しているのである。ところがおもしろいことに、

折角孔子の如上の「窮」状の根源を指摘しておきながら、恐らく莊子自身が観念性の強い言辞を駆使してその哲学を表現するために、終局の時点で動もすれば孔子の発言と同化融合してしまう傾向を見せることである。例えば「陳蔡の厄」を記述した説話（雑・讓王）の後半部分にその混淆状況を垣間見ることができよう。いま、同話を留める『呂氏春秋』（慎人篇）と『風俗通義』（窮通篇）を比較対照しながら（『風俗通』の原文を括弧で補う）次に掲げる。なお、「孔子窮於陳蔡之間云々」の文は〈外・山木〉の第四、五、七の説話に重出し、〈雑・盜跖〉や〈雑・漁父〉にも記述されている。

——孔子、陳蔡の間に窮（困）し、七日火食せ（粒を嘗め）ず。藜羹糝らず、顔色甚だ慙る。而も室に弦歌（琴を室に絃）す。顔回、菜を（戸外に）扱ぶ。子路・子貢、相与に言いて曰く、「夫子（再び）魯に逐われ、迹を衛に削られ、樹を宋に伐られ（抜かる）、商周に窮し、陳蔡に圍まる。（今復た厄を此に見る）夫子を殺す者は無罪、夫子を籍る者は禁（ぜられず）ざる無し。（夫子）弦歌鼓琴（舞）して未だ嘗て音を絶たず。君子の恥無きや、此の若きか」と。顔回（淵）、以て応（対）うる無し。入りて（以て）孔子に告ぐ。孔子（恬然として）琴を推し、喟然として歎じて曰く、「由と賜とや細（小）人なり。召（せ）し来れ、吾、之に語げん」と。子路（と）子貢（と）入る。子路曰く、「此の如き者は、窮すと謂うべし」と。孔子曰く、「（由や）是れ何の言ぞや。君子は道に通ず、之を通と謂い、道に窮す、之を窮と謂う。今、丘、仁義の道を抱き以て乱世の患に遭う。其れ何の窮すと之を為さ（有ら）ん。故に内に省みて道に窮せ（疚しから）ず、難に臨みて其の徳を失わず。天（大）寒既に至り、霜雪既に降る。吾、

是を以て松柏の茂るを知るなり。(昔者、桓公、之を莒に得、晋の文公、之を曹に得、越、之を会稽に得たり。)陳蔡の厄は丘に於いて其れ幸いならんか」と。(衛より魯に反る。詩書を刪り礼楽を定め、春秋の義を制し、素王の法を著す。復た定公を相け來谷に会し旧を昭かにして以て其の礼を正し、抗辞して以て其の侮りを拒ぐ。齊人過ちを謝し來りて鄆・龜陰の田を帰す。)孔子削然として琴を反して弦歌し、子路屹然として干を執りて舞う。子貢曰く、「吾、天の高く地の下きを知らざりしなり」と。

〔古の道を得る者は、窮するもまた楽しみ、通ずるもまた楽しむ。楽しむ所は窮通に非るなり。道此に徳れば則ち窮通は寒暑風雨の序と為らん。故に許由は潁陽に娛しみて共伯は(志を)丘首に得しなり。〕(後半の()は『風俗通』のみ、()は讓王篇のみの文章)

放浪の旅の途中、陳蔡の間に至った孔子主従は、土民兵に囲まれて一週間というもの米粒らしきものにありつけず、わずかに野の菜のスープで飢えをしのぐという窮地に追い込まれた。がまんの限界に達した弟子の子路が「日ごろもつともらしいことを並べたてる君子でもこういう羽目に陥ることがあるんですね」と皮肉ると、孔子は「君子だつてももちろん困窮することがある。ただ小人が困窮するとはしたばたしてあらぬことでもしでかすのと異なる」とお説教を垂れたもうた。——という『論語』衛靈公篇の原話に脚色を加え作りあげたのが右の説話であろう。

子路や子貢が厳しい現実を直視し脱出口を探しあぐねてついもらった憤懣に対し、孔子はそれをはぐらかすかのように観念論で現状を解釈し削然たる態度を誇示してみせる。両書とも現実の窮状を認

めず、道という観念に逃げ口上を見出している点は共通する。違ふところは『風俗通』がむしろ窮状を固持し沈潜することにより将来の幸福を期待する考え方と、『莊子』の方は「塞翁が馬」よろしく、窮通はめぐると考えている点である。そうすると、莊子のいつもの批判的観点は、ここではすっかり鳴りをひそめ、恰も廂を貸して母屋を取られるが如く、道という語を境にすっかり儒教思想の世界へのめり込んでいつている様子が感知されるのである。ここに我々はかねて超越的言辞を弄する莊子の、己れと同様な観念語を使うものに弱いという一面をはからずも発見するのだ。

二

夫水行莫如用舟、而陸行莫如用車。以舟之可行於水也、而求推之於陸、則没世不行尋常。古今非水陸与、周魯非舟車与。今斬行周於魯、是猶推舟於陸也。勞而無功、身必有殃。彼未知夫無方之傳、応物而不窮者也。

夫れ水行には舟を用ふるに如くは莫く、陸行には車を用ふるに如くは莫し。舟の水を行くべくを以てして、之を陸に推さんことを求むれば、則ち世を没ふるも尋常も行かじ。古今は水陸に非ざるか。周魯は舟車に非ざるか。今、周を魯に行はんことを斬むるは、是れ猶ほ舟を陸に推すがごときなり。勞するも功無く、身に必ず殃あらん。彼未だ夫の無方の傳の、物に應じて窮らざるものを知らざるなり。

上段で芻狗のたとえをあげて孔子の時代錯誤を批判した師金は、本段では舟車のたとえで孔子の頑迷ぶりを指摘する。

